雑誌「医療」への投稿をお待ちしています

国立病院機構東京医療センター
副院長
樅山　幸彦

2020年４月より本誌の編集委員長に就任しました．東京医療センターに勤務して14年が経ち，毎月送られてくる本誌は馴染み深い医療雑誌の１つです．国立病院機構の病院や国立高度専門医療研究センター等に勤務する方々が自身の研究を発表するだけでなく，良かった施設での取り組みなどを他施設に向けて報告する場となっています．医師や看護師といった特定の専門職向けの雑誌でなく，医療従事者全てに向けての雑誌である点も大きな特徴の１つです．そのためどの職種にもわかる記述をお願いし，Accept後も編集委員会で話し合って記述をよりわかりやすく修正しています．投稿された論文は２人の査読者（多くは編集委員）に査読されますが，査読コメントはより良い論文とするためのアドバイスといった感じのもので，論文の欠点を指摘してRejectするものではありません．査読者からのコメントを参考に修正すれば論文はきっと興味深い価値あるものとなるでしょう．すべての職種の方で医療論文を書くことに馴染みのない方には本誌は投稿しやすく，むしろ是非投稿していただきたい雑誌です．

初めての医療論文はまず興味深く思った症例の症例報告を書くとよいでしょう．私自身初めて論文を書いたのは卒後３年目に治療に難渋したアミロイドーシス合併クローン病の症例報告でした．指導医に強く勧められ，やっと書いた印象です．しかし実際書いてみると，文献検索をし，その症例の貴重な点，今後同様な症例を治療する上で有用となる点をまとめたことで達成感を感じ，掲載された時はとても嬉しかったのを思い出します．皮膚科医をめざして一般病院で内科研修していた頃の症例ですが，その後循環器に興味をもち，大学にもどらず循環器内科医となりました．学会に行き，発表して美味しいものを食べたいという気持ちで臨床研究を始めました．論文を書くことからは遠ざかっていましたが，大学勤務の同級生が自分の論文をよく自慢することから，私自身も論文を書こうと思うようになりました．どんな興味深い研究結果でも論文にしていないと発表したことになりません．

ガイドラインや有名誌の論文を読み，まだ明らかでない点があれば文献検索し，自験例で調べてみる．そのような形で臨床研究を始めました．循環器領域では心電図に興味があり，拡張型心筋症（DCM）は左室肥大所見が多いが特徴的所見はないとされていましたが，症例をみていると胸部誘導Ｖ６のR波電位が高いのに肢誘導では逆に低い印象をもち，DCM45例，弁膜症に伴う左室拡大54例，高血圧に伴う左室肥大101例と健常63例の心電図でコツコツと電位を測定し，RV６とＲＩ,Ⅱ,Ⅲの比３以上はDCMに特徴的なことを日本心電学会と国際心電学会議で発表できました．しかし論文を書いてみると普段目にする英文誌に投稿するもすぐRejectされ，考えが甘かったです．４つ目の雑誌でようやくAcceptされましたが，査読者の意見は私が見逃していた点などさすがと思うコメントでした．論文にする過程で多くのことを学び，他人の論文を見る目も変わりました．そして論文が掲載された時は娘が生まれたように嬉しく，その後論文が掲載される度に娘が増えた感じです．新しいことを見つける目を養うことは医師としての診察能力も高めると思います．一般病院に勤務していると論文を書かないことに慣れがちですが，是非一度論文を書くことにチャレンジしてみて下さい．雑誌「医療」への投稿をお待ちしています．